

梓 あすさ
林太郎 りん たろう

書下ろし長編本格推理小説

修羅 しゅら の 断崖 だんがい



修羅の断崖 しゆら だんがい

一九九六年十月二十五日 初版発行

著者

梓 あずさ 林 りん 太郎 たろう

発行者

峯島正行

発行所

有楽出版社

東京都中央区銀座二一九一十二

森田ビル五階 ☎一〇四

TEL

〇三(三五六二)〇六七一

発売所

実業之日本社

本社

東京都中央区銀座一三一九

TEL

〇三(三五三五)四四四一(販売)

振替〇〇一〇一六—三二六

支局

大阪市北区曾根崎二一七

梅田第一ビル内

TEL

〇六(三一一二)一五七三

印刷

大日本印刷株式会社

製本

乱丁、落丁の場合はお取り替えます。

ISBN4-408-60069-5

定価780円

©R. Azusa 1996
Printed in Japan



JOY NOVELS

書下し長編本格推理小説

しゆ ら だん がい
修羅の断崖

あずさ りん た ろう
梓 林太郎

実業之日本社

修羅の断崖

カバー画／辰巳四郎
写真提供／藤沢健一
本文挿画／中渡治孝
装幀／サン・プランニング

安曇野周辺図

北安曇郡

白馬村

小谷村

至 糸魚川

南小谷

白馬

剣岳

立山

信濃大町

大糸線

至長野

有明
穂高

槍ヶ岳

常念岳

穂高岳

蝶ヶ岳

豊科

篠ノ井線

松本

松本電鉄

南安曇郡

十一月十九日、晴れ――

未明まで降りつづいていた雨が上がり、安曇野にも北アルプスにもすつきりとした蒼空が広がった。

十四時五十二分、大糸線南小谷を発った新宿行き特急「スーパ―あずさ10号」は、定刻どおり十五時四十七分に穂高駅を通過した。

グリーン車の後部座席にいた乗客の中年男が、急に胸を掻きむしって苦しみ始めた。近くの乗客がそれに気づいて、車掌に知らせた。

車掌が駆けつけてみると、苦しがついていた中年男は、血を吐いていた。座席の下に清涼飲料水の缶が一本転がった。

危険を察知した車掌は、車内電話を掛け、急病ら

しいと告げた。

急病人を次の停車駅の松本で降ろすことになった。特急は十六時二分、松本に到着した。ホームにはすでに担架が用意されていたし、駅前に救急車が待機していた。

急病人は、救急車に運び込まれたが、すでに死亡していた。が、病院に収容された。

特急は二分間停車して、なにごとくなかったように十六時四分、新宿へ向かって走り出した。

乗客の死亡は、すぐに松本警察署へ連絡された。

署員は病院で、救急隊員から事情をきいた。松本駅員からも同じことをきいた。

死亡した乗客が急に苦しみ出したのが、穂高駅を通過した直後ということから、管轄警察は豊科署ということになった。

死亡した男の身元は、所持品から判明した。名刺

を何枚も持っていたし、スーツの上着についた名字も同じだった。

その名刺はこうなっていた。

〔ペンション・緑明館 宮沢種継 長野県北安曇郡小谷村〕

松本署からの急報で、刑事課の道原伝吉と伏見日出男は、松本市の信州大学医学部付属病院へ飛んだ。遺体を視た医師は、青酸性毒物による中毒死といった。

遺体は解剖されることになった。

道原は、遺体の所持品から身元の分かりそうな物をノートに控えて署に帰った。

宮沢種継の名刺の番号に電話した。ペンション・緑明館の従業員が応え、宮沢の妻に代わった。

「主人は、東京へ行きましたが……」

警察からの問い合わせにうろたえているふうだった。

「宮沢さんは、何時発の列車にお乗りになりましたか？」

「三時近い『あずさ』に乗るといって、家を出しましたが。……あつ、十四時五十二分発です。あのう、主人が、なにか？」

道原はそれに答えず、宮沢の服装と持ち物をきいた。

「灰色の背広に、紺色のネクタイです。茶色の鞆を持って行きましたが……」

「ご主人によく似た方が、列車の中で毒のような物を飲んで、松本の病院に収容されました」

「列車の中で、毒を……」

妻は人違いではないかときいた。

道原は、宮沢らしい人が死亡したとはいわなかった。

た。家族の動揺を考慮したのだ。

彼女は、すぐに病院へ駆けつけると答えた。

「スーパーあずさ10号」は、すでに甲府を過ぎているはずだった。

松本駅へ連絡し、宮沢種継らしい男の乗っていた座席に、乗客を近寄らせないでもらいたいと頼んだ。警視庁新宿署に、グリーン車の宮沢らしい男が乗っていた座席付近を検べてくれと依頼した。現場保存である。

特急「スーパーあずさ10号」は、定刻どおり十八時三十分には新宿に到着した。

その三十分後、新宿署から豊科署に連絡が入った。グリーン車の宮沢と思われる男が乗っていた座席の下から、一本の清涼飲料水の缶とハンカチを発見し、毛髪約三十本を採取して保管しているということだった。

松本市の信州大学法医学教室に、宮沢種継の細君と次女とペンションの従業員一人の三人が到着した。三人は、列車内で毒物を飲んで死亡した遺体と対面した。遺体はやはり宮沢種継だった。

三人は、豊科署の係官にともなわれて署へやってきた。当然のことだが、三人とも顔面は蒼白だった。宮沢の細君は弘美という名だった。なにが起こって夫が死亡したのか、訳が分からないという表情のまま、係官に小会議室へ案内された。

道原は正面から弘美に悔みを述べた。

彼女は椅子を立ち、無言で頭を下げた。

次女と従業員が横に並んで腰掛けた。

婦警が、三人の前へお茶を置き、一礼して去った。道原は、弘美の呼吸が落着くのを待つて話をきいた。

宮沢は、五十三歳。小谷村でペンションを經營して十四年になるという。

「ご主人は、列車内で毒物の混った飲料水を飲んでお亡くなりになったようです。自殺ということも考えられますが、お心当たりがありますか？」

「そんな。……心当たりなんか、ありません」

弘美は喉を痛めているような声で答えた。

道原は、次女の惇子と、吉川という男の従業員に、同じことを目撃できた。二人は同時に首を横に振った。

「まだ詳しいことは分かっていますが、ご主人がすわっていたグリーン車の座席の下に、清涼飲料水Aの缶が一本転がっていました。その中に毒物が入っていたことが考えられます。ご主人はAを持って、お宅を出たんですか？」

「いいえ。そういう物は持って行かなかったと思い

ます」

「奥さんは、Aをご存じですね？」

「知っています。うちのペンションの自動販売機にも入っていますから」

「ご主人は、Aをよく飲んでおられましたか？」

「缶入り飲料はめったに飲みません。主人はコーヒーが好きで、毎日、三杯ぐらい飲みますが、コーヒーマーカで点てたものです」

弘美は、何回もハンカチで鼻を押さえた。

「ご主人がすわっていた座席の下に、白地に緑色の縁取りのあるハンカチが落ちていました。これも新宿署が保管していますが、ご主人の物と思われますか？」

「主人の物だと思います。けさ、わたしがワイシャツと一緒にそろえておきましたから」
そういつて弘美は、嗚咽おとげを始めた。

横にすわった惇子も泣き出したが、彼女は母親の肩に手を掛けた。

道原の質問はしばらく中断した。

「ご主人の旅行目的はなんでしたか？」

「主人は、小学校の同期会の幹事でした。来年三月、東京で同期会をやることになっていましたので、それの打ち合わせを、東京にいる同級生とするためでした」

宮沢は一人で出掛け、新宿駅ビルにあるレストランで、幹事である同級生の二人に会うことになっていたという。

「ご主人は、小谷村のお生まれですか？」

「蝶沢村です」
ちやうざわ

「蝶沢の」

道原は持っていたペンをとめた。

蝶沢村は、南安曇郡で、豊科町の隣接である。烏からす

川扇状地に発達した農村だが、近年人口が増加し、八千二百余人となった。宮沢は、蝶沢小学校を昭和三十年（一九五五）に卒業した。その同期会は「蝶沢三十年会」と呼んで、卒業以来つづけられている。毎年一回、村内か松本市で催されるが、来年は各地に散っている同期卒業生と、当時の教師を集めて、東京で開くことになっていたという。

「新宿のレストランで、どなたと会うか、奥さんはご存じでしたか？」

「二人のうち一人は菅沼さんときいていました」
すがぬま

道原は、菅沼の連絡場所をきいた。

宮沢の同級生の菅沼たちは、宮沢が現われるのを、レストランで待っていたに違いない。約束の時間は午後七時だったという。

その時間はとうに過ぎた。二人は、宮沢がやってこないのか、どうしたのかと思ったことだろう。

弘美は、小谷村の自宅へ電話した。ペンションと自宅は同じ場所だという。

彼女は涙声で話していた。宮沢が死んだことをきいて、家族もペンションの従業員も齒の根が合わなくなつたのではないか。

弘美は電話を切った。話した相手は、長女の立子たちこだつたといつた。立子も惇子も独身で、ペンションに従事していることである。

「菅沼さんから電話が入つたそうです」

弘美はいつた。

宮沢が到着しないので、小谷村の自宅へ掛けてみたのだらう。立子が出て、父は東京へ向かう車中で事故に遭つただけ答えたという。

松本駅から電話があつた。

上りの「スーパ―あずさ10号」の乗務員は、二十時新宿発の「スーパ―あずさ15号」で松本へ戻つて

くるというのだつた。

その乗務員の中に、車内で苦しがつている宮沢を見て、車内電話で措置を連絡し、松本駅で降ろした車掌がいる。

折り返し列車は、二十二時三十九分に松本に着くという。

2

車掌は五十歳ぐらいだつた。

「グリーン車の隣の車掌室にいましたら、お客さんが、『病人です』と、ドアを叩きました」

それで彼は座席を見に行つた。そのとき宮沢は床に血と泡を吐いて、からだをくの字に曲げていた。

これを見て彼は、タダごとでないと判断し、指令室に車内電話を掛けたという。

「あなたは、その前に血を吐いていたお客さんを、座席で見えていますか？」

道原はきいた。

「はい。白馬^{はくば}を発車してから、乗車券を拝見に行きました」

「そのとき、変わったことはなかったですか？」

「たしか、通路に女の方が立っていて、亡くなられたお客さんと話していました」

これは注目すべき証言だ。

「間違いないですね？」

「間違いありません。南小谷、松本間のグリーン車には、十二人しか乗っていませんでしたので、よく覚えています」

十二人のうち三人は白馬で、四人は信濃^{しなの}大町^{おおまち}で乗車したという。

「その女性はグリーン車の乗客でしたか？」

「いいえ。グリーン車には乗っていません。ほかの車両からおおいになつたか、通路を歩いていて、亡くなられたお客さんを目にして、立ち話をされていたのではないかと思います」

「どんな女性か、覚えていますか？」

「そうですね、三十歳ぐらいではなかったでしょう。わりと背の高い人だったという記憶があります」

「その女性は、宮沢さんとどのぐらいのあいだ話していましたか？」

「列車が信濃大町に着いたときには、いなかったよ。うな気がします」

車掌が、検札を始めたのが列車が白馬を発車してからという。次の停車駅が信濃大町だった。白馬を発車したのが十五時六分で、信濃大町着が十五時三十分だ。

宮沢の座席の脇に立って、彼と話していた女性は、白馬から乗車したのではないか。他の車両の指定席か自由席に行こうとしてグリーン車内を通過しようとしたら、知り合いの宮沢が乗っていた。それで白馬、信濃大町間の二十四分のあいだの何分間かを立ち話したということか。

宮沢の妻の話だと、彼は缶入りの清涼飲料水など飲むことはめつたにないという。車内でなにかを買って飲んだとしたら、ビールかコーヒーだろうといっている。

普段、缶入りの飲料水を買って飲む習慣のない人でも、喉が乾いたため、駅のホームか車内販売の物を買ったということも考えられる。

あるいは、車内で会った女性が飲料水を持っていた、それをもらったのだろうか。

その飲料水には毒が混入されていた。宮沢を殺害

する目的で毒を混入し、彼に与えた可能性は充分考えられた。

宮沢は、缶入り清涼飲料水が嫌いで、一切口にしないというわけではなさそうだ。ジュース類を飲むくらいならビールにするという男だったらしい。

やはり立ち話していた女性が怪しい。彼には飲料水を買って飲む習慣はなかったが、女性にもらったので、つい口にしたということかもしれない。

道原は車掌に、宮沢と話していた女性の服装を覚えていのかをきいた。

車掌は、思い出そうとしたが、忘れたと答えた。無理もないことだ。まさか、女性と話していたグリーン車の乗客が、血を吐いて死亡するなど、毛先ほども想像しなかっただろう。

「女性の顔を見れば分かりますか？」

「自信がありません」

車掌は頭に手をやった。

宮沢種継の解剖結果が発表された。

死因は、ジュースに混入したシアン化カリウムによる全身性痙攣、呼吸麻痺。

死亡推定時刻は、十一月十九日午後四時ごろ。

「スーパーあずさ10号」に乗務して新宿へ向った車内販売の従業員は、新宿発十九時の「スーパーあずさ13号」に乗務して、松本へ戻ってきた。

捜査員はワゴンサービスの女性に会った。彼女はグリーン車の乗客だった宮沢を覚えていなかった。

彼が飲んだ缶ジュースは、車内販売が扱っていないことが分かった。したがって、宮沢が他所で買って持ち込んだか、誰かにもらった物ということになった。

このことから、宮沢と車内で話していた女性は重要とにらんだ。

宮沢の長女立子から豊科署に連絡があった。

宮沢と新宿駅ビルのレストランで会うことになった同級生の、菅沼と戸塚が、二十三日五十五分に松本に着く特急に乗ったというのだった。

二人は、宮沢が着かないので、小谷村の彼の自宅に電話した。電話に応じた立子は、「父は、東京へ向かう途中、事故に遭い、行けなくなった」と答えた。

これをきいた二人は、「事故とはなにか？」と、再度電話を入れた。二度目に受けた電話で立子は、「父は亡くなりました」と答えた。

驚いた二人は話し合い、小谷村へ向かったものかどうかを、また立子に相談した。